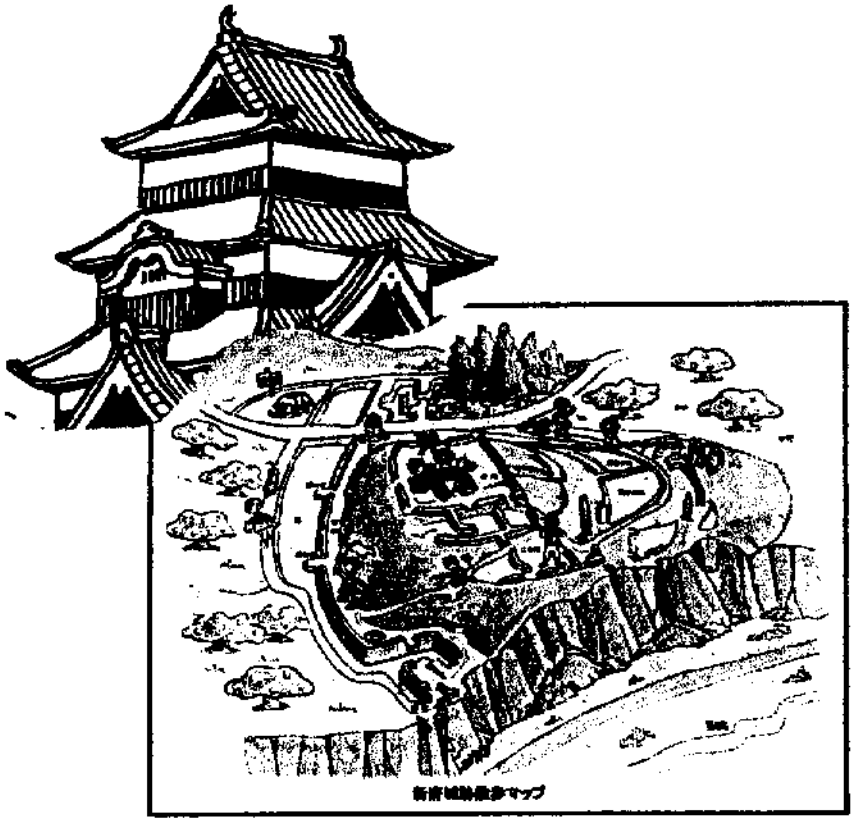
平成１９年度やまなし再発見講座＆埋蔵文化財シンポ

平成の兵どもの城づくり

ー特別講演＆シンポジウムー



主　催　　山梨県生涯学習推進センター・ 山梨県埋蔵文化財センター

「平成の兵どもの城づくり」

―やまなし城館探訪―

開催趣旨

城館跡の保存整備が計画され、このための発掘調査や資料調査により多くの成果が得られています。また、城館跡は散策しながら、往時をしのぶことができるように整備も進められています。

そこで、城館跡の保存整備を担当している専門家から、それぞれの城館跡の特徴や最新の調査成果、実際の保存整備で重点を置いていることなど、城館跡探訪のポイントを平易に解説していただきます。

特別講演では、甲斐・信濃の武田氏城館について、文献史学研究成果を踏まえた斬新な視点からの講演をいただきます。

まとめのパネルディスカッションでは、やまなしの城館跡の特徴や歴史的価値を討論により、浮き彫りにして、やまなしの城館跡をじっくりと探訪するための糧となることをめざします。

日　　程

◆特別講演　　13:30～15:00

「甲斐・信濃の武田氏城館とその後」

講師　　信州大学人文学部教授　　笹本　正治　氏

◆休　　憩　　15:00～15:10

◆パネルディスカッション　　15:10～16:30

「やまなしの城館跡の歴史的価値」

パネラー

信州大学人文学部教授	笹本　正治　氏
北杜市教育委員会	渡辺　泰彦　氏
甲府市教育委員会	佐々木　満　氏
韮崎市教育委員会	山下　孝司　氏
山梨県埋蔵文化財センター	野代　幸和　氏

コーディネーター

山梨県埋蔵文化財センター所長	末木　健　氏

目　　次

特別講演資料 ---------- １ ～ １１

「甲斐・信濃の武田氏城館とその後」

講師　信州大学人文学部教授　笹本　正治　氏

各城郭跡の講演資料（１回～４回） ---------- １２ ～ ２９

国指定史跡「谷戸城跡を探る」　講演：２月１４日

講師　北杜市教育委員会　渡辺　泰彦　氏

国指定史跡「武田氏館跡を探る」　講演：２月２０日

講師　甲府市教育委員会　佐々木　満　氏

国指定史跡「新府城跡を探る」　講演：２月２７日

講師　韮崎市教育委員会　山下　孝司　氏

県指定史跡「甲府城跡を探る」　講演：３月５日

講師　山梨県埋蔵文化財センター　野代　幸和　氏

甲斐・信濃の武田氏城跡とその後
—研究の課題を中心に—

笹本正治

はじめに

城とは何か

しろ【城】＝《名》敵の来襲を防ぐための軍事的施設。古代では朝鮮半島からの来攻に備えた九州北部の大野城などがあり、また、東北の蝦夷対策のための多賀城や払田柵（ほったのさく）などがあった。前者は山の斜面、または尾根を利用して土塁・柵などをめぐらしたものであったが、後者は単なる軍事的施設ではなく、地方官庁的性格を合わせもったものであった。中世では山上に築き、山下に居館をおいていたが、この頃のものは堀・土塁・柵などをめぐらした程度の簡単な施設しかなかった。室町時代末以後、戦乱が長引き、戦闘の規模が拡大してくると、山上の山城では常時の領国統治に不便なため、領地の中心に設ける必要が生じ、丘陵を利用した平山城ができ、周囲に家臣の邸宅をおき、城下町が形成され、城の施設も天守を中心とし、堀・石垣・土塀・櫓（やぐら）をめぐらした強固なものとなった。また、全くの平地に築かれた平城もある。桃山時代には領地の中心にある本城のほか、支城・境目の城・繋ぎの城・詰の城・向城など、いくつかの城を築いたが、元和元年（一六一五）の「一国一城令」により、本城だけが許され、しかもその修理・改築にも厳重な制限が行なわれるようになった。城郭。き。じょう。（以下略）（『日本国語大辞典』第11巻）

しろ「城」＝軍勢が立てこもって敵を防ぐ構築物。要害の地に敵を防ぐ設けは、古く「き」と称し、「柵・城」の字が当てられた。後にそれぞれ音読して、「さく」または「じやう」といわれる。「城」は、漢語で都市を囲繞する防壁をいう。（中略）中世、武家は館に居住し、戦時防御物として領地周辺の要害に城が設けられていたが、室町後期のいわゆる戦国時代に、山にある城、すなわち山城（やまじろ）の麓に居館を設けることがおこなわれ、さらに上杉氏の春日山城、佐々木氏の観音寺城、松永氏の信貴山城の如く、山城の中に住居を移す者が多く生じた。信長の安土城も、その例である。こうして「しろ」は、領主の居館兼政庁という意味を生じた。安土桃山時代から、大名が領国統治の必要上、居城を交通の便利な平地に構え、城の周辺に家臣団を居住させ、また商人や工人を城下に集めることになり、城下町が発達した。（以下略）（『角川古語大辞典』第3巻 361頁）

館とは何か

やかた　館　「たち」「たて」とも。豪族・領主の居館をさす。古墳時代に豪族居館がみられ、近年多数発掘されている。その後、平安後期以降に各地に再び出現した。中世前期、領主の政務・儀礼の場を兼ねる場合は「たち」とよんだ。領主の格に応じて規模にも差がある。方形の曲輪一つに土塁・堀をめぐらし、その外に被官屋敷や直営田を廃したタイプが典型としてよく知られているが、塀や溝などで区画しただけのものも多い。（『角川日本史辞典』、1996）

＊中世を代表する歴史的な施設である城と館

城については特に山城
館は豪族・領主の居館であって、一般民衆の居住地ではない
館は領主の役割が何かを考える材料にもなる
人間の社会生活では、争いが生じる
→防御を図るようになり、居住地などに防御の施設を造る
人間とは何かを考える素材として、居住地（居館・屋敷）と戦争を意識した城
→何よりも地域を考える素材、学ぶ対象としての文化財としての山城と居館

1　城や館に何を設けるか

地域支配の砦でもある館も戦争用の城も防御をする＝堀、虎口、土塁など

1　敵の攻撃から身を守る装置

人がとどまり、相手から身を守り攻撃する広さ・平地＝郭
垣（家の周囲や庭などを囲ったり仕切ったりする、竹・木・石などで作った区切り。垣根。－三省堂『大辞林』以下同じ）
柵（木や竹を一定の間において立て、それに横木をとりつけて、人や動物が勝手に出入りできないようにした垣）
逆茂木（敵の侵入を防ぐため、いばらなどのとげのある木の枝を並べて垣にしたもの）
堀（敵の侵入を防ぐため周囲を掘って水をたたえた所）＝武田氏の場合三日月堀が有名
塀（家・屋敷などの境界に設ける、板などの囲い）
土塁（土を積みあげて築いたとりで。また、城館の曲輪に設けられた土手。土居）
石塁（石を積み上げて作った防御用の土手。またそれをめぐらしたとりで）
切岸
虎口（城郭・陣営の要所にある出入り口。枡形の仕切りをもち、その中を曲折して出入りする）＝武田氏の場合、丸馬出とセットで有名
櫓（敵の動静の監視）
→中世の城－戦争用の施設で、原則として居住空間ではない。象徴としての山城
山城を確認する際の目安としての郭と堀切
＊戦争は時代とともに大きくなり、防御施設も大規模化
→武田氏時代よりも後の時代の方が規模が拡大し、縄張も複雑化

2　生活を送るために必要なもの

建物・構造物（身を守り生活する、武器や食糧の貯蔵）
煮炊きの竈・暖房施設
生活を可能にする水
トイレ
建て物や庭の配置
公的空間と私的空間
接待の持つ意味
儀式の持つ意味
→礎石が残っているか否か

3　見せるための城や居館

領民を威圧＝力の誇示
　石垣、甲府城の金箔瓦
格式の明示
　門＝新府城の復元
道具＝武田氏館跡から発掘された青磁鎬文酒海壺→骨董品

2　甲斐・信濃における武田氏の城跡

何をもって武田氏の城跡とするのか

→武田氏の領国内にあるものすべてが武田氏の城跡とは限らない
　戦国時代の国人領主の独立性は極めて高い
武田氏が甲斐にいた時代は長い＝多くの場合、信虎・信玄・勝頼の時代しか考えない
＊谷戸城（北杜市）＝甲斐源氏の祖新羅三郎義光の孫逸見黒源太清光の居城といわれる
　現状は戦国時代のもの＝平安末の城の実態は不明
確実な城（史料から裏付けられるもの）
　甲斐＝要害城、躑躅ヶ崎館、新府城など
　　信濃＝上原城、高島城、高遠城、大島城、内山城、牧之島城など
　　重要な城の多くは古くから占地され、手が加えられてきた
　　武田氏滅亡後も使用＝積み重なる歴史
＊武田氏館には館を築く以前にも歴史がある
　参考－深志城（松本城）と坂西氏→近世の松本城、高遠城と高遠氏→近世の高遠城
　　地域の統治・経済の重要地点は、いつの時代でも重要
　　前の代から町化
○城や館は常に修理が加えられていた
　現在でも住居には次々に改修の手が加えられる＝リフォーム
　中世の山城はほとんど石垣が用いられず、土を盛ったり、掘ったりしただけ
　→補修しないと崩れたり堀が埋まる＝現在残る遺構は当時の状況とは大きく異なる
　城は基本的に武器＝武器は常に最新技術が導入され続ける
　　→参考・鉄砲の導入と城造りの変化
○現存する山城→現在残っている城跡は使用が終った時点の遺構
　（参考）一国一城令　徳川幕府が諸大名の軍事力を削減する目的で、居城以外の領内の城の破却を命じた法令で、元和元年（1615）大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼすと、その年の閏6月13日幕府年寄衆の奉書をもって諸大名にあてて「貴殿後分国中居城をば被残置、其外之城者悉可有破却之旨上意候」（『毛利四代実録考証』）と通達した。なお同じ日付で「一国一城之外破却候様にと被仰出候」（『鍋島勝茂譜考補』）という奉書が出されているところから、一国一城令と呼ばれているが、この場合の一国は一つの分国を意味していた。（今井林太郎「一国一城令」・『国史大辞典』第1巻 673頁・吉川弘文館・1979）
　城や館は城割、破城などがされている（城の生命を絶ちきる＝その意味）
　→城割の場所は虎口など重要地点
丸馬出と三日月堀を持っていれば武田氏の城か
　現況から武田氏時代の城を読み解くのは極めて危険＝発掘の成果と武田氏館跡

→地上の構築物は消滅、大地を整地した跡が風化しながら残っている
→当時の状況と現状は大きく異なる（歩けばわかるものではない）
→だから考古学が重要

伝統と格式

館の規模＝京都のモデル化とほぼ同じ大きさ、建物配置
→見せるための居館と城＝現代でも家はシンボル
誰がいた居館・城か（継続する歴史の主張）
中国の故宮＝この地を押さえれば異民族であっても中華帝国の支配者
前の領主の代を押さえることに意義
＊上原城と武田氏
＊武田氏は葛尾城をどうしたのか
→前の領主のシンボルの接収と破壊（破城）
→武田氏居館跡の中心部には誰が入ったのか＝城代や家臣でも入れたのか
西側虎口の部分の巨大化と居住者
天守台は誰が築いたのか

城と館の研究の現状と課題

△山城などと紛らわしい施設

1　山における平地
作業場（木を伐る、炭焼竈、鉱物を精錬する、木工をする、狩の場）
一時的居住のため造られた小屋跡
2　土塁や堀
目印－土地の境・地域分割
防御－鹿垣なども
土砂などの流失を防ぐ－石垣、水田、畑
道を作る
木を運び出すだけでも土が掘れて堀のようになる
→城などの装置の特性は、他の装置とも紛れやすい。特に居館と城の区別は難しい
→城の目的、地域における意義・役割の全体像を理解した上で位置付ける

【山城や館の認識】

防御施設は居館にも設けられる
－安全を考えない住居はない。特に戦争状態では防御が重要＝精神的なものが多い
→沖縄のひんぷん－屋敷の正門と母屋との間に設けられた屏風石
家の入口のお札やお守り。
→現在に残っている城跡の多くは戦国最末期・近世初頭の形態を伝える
→居館、林業の作業小屋、寺社などの跡とどのようにして区別するのか
＜城や建物などの研究＞　基本的に風化した土台部分からその上の建造物等を推定
近世の城を大地や石垣のみでは検討しない、山城研究は残った自然景観論が強い

【山城・居館研究の実態】

1　戦略の道具として山城を見る－縄張論、虎口論、堀論
→この視点が従来の山城研究の主体→研究方法としての縄張図（縄張図か実測図か）

＊一長一短→近世以来の伝統を引く＝各家などに伝わる縄張図
＊江戸時代の軍事態勢以来、戦争好きは多い
→現在の遺構がどのような状況・限界性を帯びるのかの認識が弱い
○残っている状況で山城を研究しようとするなら、考古学的な手法が最善
－現在の考古学は研究を目的とするよりも緊急発掘が多い
→考古遺物として残るものと残らないものの区別を鮮明にする必要＝視点が大事
2　文化財の一環として史料に出る山城を研究＝『史蹟跡名勝天然記念物調査報告』
→古い史料に名前が出る城、有名人にかかわる城が評価、城自体の位置付けが弱い
＊山梨県の場合、武田の城としての評価が高すぎる＝武田氏館跡
○従来は城も古文書を主体とした研究－この場合、古文書がなくては研究ができない
→古文書は偶然性、保存者の意図によって伝わる
文書作成者が存在した山城のすべてを記すとは限らない
古文書が記している時期の山城が残っているわけではない
→ただし、古文書的にしか理解できない山城研究は存在する
3　郷土史を学ぶ手段として地域に残る山城に着目
→重要であるが、手段が確立しないため、１、２の危険性をそのまま持つ
→お国自慢、郷土自慢、古ければ古いほど価値をもち、有名人に関係すればするほど価値をもつと考えがち　→私はお国自慢自体は必要だと思うが
4　研究の方法としての地名
○地名などによる歴史地理学的な研究
－地名が何時出来、どの程度存続するのかといった基本的な研究がなされない
地名は動くことがある
恣意的な理解になる
→地名が有力な武器になることは言うまでもない
5　社会発展の中に山城を位置付ける
→歴史を学ぶ者の基本的姿勢
→目下のところ研究はここまで進んでいない
→今後は、考古学・歴史学・建築学・地理学・民俗学・地学・植物学などとの学際的研究が必要
→進みつつある居館跡の研究＝次々に発掘される事例の増加
旧来の考え方への疑問＝堀の問題と境目・縦穴・配置の問題
居館のある場所は現在まで重なって家が造られる事が多い

3　研究の視点

【何処に城は築かれるのか】

＊城は目的や意義なくして築かれない、それぞれの城の築城目的解明が第一
→軍事機能として見るだけでは一面を見るに過ぎない
＊社会の中に位置付ける見方
→地域支配と場、占地や建物配置と陰陽道的意識（風水思想）、それぞれの城の地理的共通性－例えば一乗谷と甲府－、領域におけるシンボルとしての城

1　戦争時の逃げ込む場－防御の施設

生活空間としての条件が悪いところでも城にはなる。むしろ悪い所が多い

参考・武田氏の要害城＝ようがい（要害）①険しい地形で、敵の攻撃を防ぐのに便利なこと。また、その土地。②　城塞。城館。とりで。③防御をかためること。用心すること。

精神的な背景

要害としての家－木々に囲まれた不可侵性←（民俗学の成果から）

屋敷の不可侵性と要害城の独立－どの要素が要害城に持ち込まれるのか

逃げ込みのための山城と地名－虚空蔵山城、愛宕山城、稲荷山城、天神城、飯綱城（宗教的な地名の山城をどのように考えるか）

→地名と中世人の神などに対する意識＝岩山と城→磐座と城

＊岩殿城

山がない場所では何処に逃げ込むのか

→深志小笠原氏の井川城跡＝水に囲まれた島状台地

→戦乱から身を守るための手段→山城だけが城ではない

→社会慣習としての逃げ込みの場（アジール）の存在

武田氏滅亡後も使われた要害城＝権威のシンボルか、戦略的意味か

2　城や居館の所有と一族意識

屋敷墓、屋敷神

泣いて危機を知らせる石（夜泣き石）＝地発などとの関係

一族の城（中世）か地域の公共的な場（近世）か

→転封と城＝城は個人のものではない（天下のもの）

4　領域境の城

国境警備＝本栖城、妻籠城

→近世の関所との関係

警備と侵略の拠点＝内山城（佐久市）、岩殿城

5　道や川・港などの確保と山城－交通路（物資・軍事）と城

棒道と城＝枡形城（茅野市）、若神子城

参考・海の城

＊信濃の武田氏関係の城と川

＝海津城と千曲川、大島城と天竜川、牧之島城と犀川、松本城と田川・奈良井川

→中世の河川交通と城

6　城などの攻撃用の陣地として＝戦略と山城

付城（向城）

7　領域支配の拠点として＝平城へ

深志城（松本市）、海津城（長野市）

→すべての山城を居館とのセットで考えることは無意味

8　連絡用（情報網）の諸施設

狼煙台、鐘撞堂、見張り台

【目的と意図による山城の差】

1　日常的に生活できるのか、一時的な逃げ込みの場か

→水の入手、建物の配置、竈の有無、礎石建物か否か、食糧などの貯蔵
隷属する人々の居住、職人や商人

2　根小屋論とその問題点
→近世からみた都市論を中世にさかのぼらせることの危険性
→領主が強い支配力を持つと考えることも疑問

3　城や館の大小や配置そのものが意味を持つ

【時代の特性を山城に見る】

歴史の産物として山城は存在、その時代の特性を探る必要がある

1　規模の大小と目的意識
→大きな山城を作るには多くの費用と人足＝それだけの必要性
大規模城郭と小規模城郭との機能分類（階級分類では不可能）

2　縄張などの特性と時代
→軍事的緊張が高まり、戦争が激しくなれば、城の規模や縄張りも大きなる
築城主体者の権力、経済力が大きくなれば大規模化する
→武田氏館跡と豊臣氏、徳川氏＝巨大化

3　戦争の変化と山城
→戦争用の食料は誰が用意するのか、武士の動員規模はどの程度か
→武器による変化－参考・鉄砲と大砲
→山城は本当に最後まで戦争をするための道具か
→地域を傘下に収めるための戦争と、全国統一のための戦争との差

4　山城の技術と技術者の関係
→縄張りや堀切の特性（松本地方の二重三重の堀切とその間の土塁）

5　石垣の持つ意味
→石垣がない近世の城もある＝高遠城の評価・山本勘助論

6　思いこみと論理
→新府城の出構＝防御装置か堀の水位調節か

【民衆にとっての城や館の意味】

1　城や館を築かされるのは誰か、日常的は補修は誰がするのか
→道具は誰が用意するのか
いかにして多くの人間を動員するのか（システム、正統性）

2　築城や館の補修で働くことと地域への賃金等の投下
→富の循環

3　民衆は山城の中に逃げ込めるのか
→民衆は何のために城や館造りに参加するのか
武士の暴力装置（武力）だけでは多くの人民を動員する事は出来ない
我々にとっての砦、地域のシンボル

3　民衆にとっての領主の意味
→民衆にとっても領主は必要だから、それに従う
→安全の保証
→農業や食料の保証

→公的な役割をもつ領主
（参考）領主の居館の用水と新田開発
4　村の持ちたる城・山小屋
→民衆は戦乱からどうやって身を守ったのか
5　廃城後の城は誰のものになるのか
近代にはほとんど公共の場＝県庁、学校
一国一城令後＝多くは公共的意味
→廃城後の管理状態（誰が管理するか）が城の意義を示す

【城や館と人々の意識変化】

1　当時の人々は山城をいかに意識していたか
→時代の中の景観としての山城（木は伐られていたのか否か）
→戦国時代の山城はどんなだったのだろう
見せる城、見せない城
2　普請と人間－中世の人々は大地に手を加える「普請」に特別な感情を抱いていた
→拙稿「『院内』考」（信州大学人文学部『人文科学論集』21 号・1987。『中世的世界から近世的世界へ―場・音・人をめぐって―』岩田書院、1993 に収録）
3　縄張と人々の意識
→上田城と鬼門除けとして東北角を欠いた本丸堀
4　神や仏によって守られる城と人の力だけで守られる城
5　地域のシンボルとしての城や館から領主の城や館へ

【城の特質からみた研究】

見せる＝廃城時どこを壊したのか
新府城の西北の門の焼失＝戦乱か意図して焼いたものか
焼土の出る場所と出ない場所
正統性・連続＝新府城へ樹木までを運んだ理由
出るべき遺物と出ない遺物

4　文化財としての活用について

1　古文書と城館跡との差異
中世の古文書を持たない町村はあるが、山城や居館跡を持たないところはない
ある程度の訓練で歴史が実感出来る
→郷土を学ぶのには最適な素材
2　地域のシンボル性
山城や居館跡の所蔵者
個人所有か、寺社所有か、村持ちか
現在でも天守閣を造りたがる地域の心理
地域の中での場の持つ意味
3　自然とともに体全体を使って学べる
子供から老人まで
風土の実感

多くの刺激（地質、地形、植生、気候など）をもって地域認識が出来る

4　きれいな公園化をする必要はない

山城などは武器なので、本来的に危険なものです

建物の復元はしっかりした学術調査の上で

5　発掘しないで将来のためにとっておくことも重要

発掘技術は必ず上がっていきます

夢を語り続けることもいいのでは

6　私の活動

『探訪・奈良井宿－奈良井氏がいた－』（楢川村教育委員会・1990、80頁）

村誌刊行の一環・ブックレット＝奈良井宿観光と居館跡の結びつけ－父と子の会話

『葛尾城を歩く』（坂城町教育委員会・1993、 128頁）

観光道路の阻止

理解できる山城の案内－父と子の会話

『堀の内中世居館跡をめぐって』（辰野町教育委員会・1995、84頁）

発掘調査報告書の前に

地域住民への学習会－講演の形態

最終的にはシンポジウムの開催

『子供たちと学ぶ妻籠城－戦乱の中の妻籠－』（南木曽町博物館・1997、 142頁）

廃校になる小学生へのプレゼント

学者と地域とを結ぶ博物館

小学生の実地見学会－小学生との対話と説明会

一般書店での販売

『高遠城跡ガイドブック－高遠城跡　この城をもっと知ろう－』（共著、高遠町教育委員会、2006年）

桜ばかりでなく城を見てもらう

他分野の執筆者と共同

地図や写真の多用

現況を維持するために努力しています（葛尾城、武居城）

観光地化する前に、なぜこれが重要かを住民に知らせる

地域を学ぶきっかけにする

おわりに

武田氏の城や館を何のために研究する必要があるのか

①甲斐の特質解明のため

・私たちのふるさとの歴史解明

・地域特性の認識

②中世の実態解明のため

・時代変化を追う

・時代の特質を追う

・社会の仕組みを考える

③歴史意識の誇りのため
・甲斐といえば武田信玄　→それでいいのかも問題

山城研究の楽しさ

地域研究の基盤としての山城・居館→どんな村や町にも存在する
→武田氏研究もこの視点から＝武田氏のためでなく地域の側から
実感できる研究対象としての山城・居館→当時の状況をほうふつできる
→復元と活用
歩く歴史のメッカ→経験する歴史学・実感としての郷土史→謎解きの楽しさ
→健康と学習
領主からみた山城・民衆からみた山城
→山城や居館は必ずしも領主だけのものではない
山城・居館への注目と破壊
→開発・観光と史跡の保存
安易な復元は止めよう＝史跡は未来への財産

大事なのは未来

地域のアイデンティティを育てる　→韮崎市
私は戦う道具である城のない時代を理想にしたい　→人はなぜ戦うのか
理想に向かって歩む

【主たる参考文献】

『日本城郭大系　7　新潟・富山・石川』（新人物往来社・1980）
『日本城郭大系　8　長野・山梨』（新人物往来社・1980）
『山梨県の中世城館跡一』（山梨県教育委員会・1986）
『長野県の中世城館跡－分布調査報告書－』（長野県教育委員会・1983）
『群馬県の中世城館跡』（群馬県教育委員会・1989）
『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』（新潟県教育委員会・1987）
『図説中世城郭事典　第二巻』（新人物往来社・1987）
中田正光『戦国武田の城』（有峰書店新社・1988）
信濃史学会編『信濃の山城』（郷土出版社・1988）
西ケ谷恭弘『日本史小百科　城郭』（近藤出版社・1988）
村田修三編『中世城郭研究論集』（新人物往来社・1990）
萩原三雄編『底本　山梨県の城』（郷土出版社・1991）
石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』（新人物往来社・1991）
千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』（新人物往来社・1993）
佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む』（山川出版社・1994）
石井進・千田嘉博編『城の語る日本史』（朝日新聞社・1996）
『別冊歴史読本　城郭研究最前線－ここまで見えてきた城の実像－』（新人物往来社・1996）
羽中田壮雄先生喜寿記念論文集刊行会編『甲斐の美術・建造物・城郭』（岩田書院・2002）
矢田俊文編『中世の城館と集散地―中世考古学と文献研究―』（高志書院・2005）
各城の発掘調査報告書など

笹本正治

昭和26年12月19日、山梨県中巨摩郡敷島町神戸（現甲斐市）に生れる。
昭和45年山梨県立甲府第一高等学校卒業。
昭和49年信州大学人文学部を卒業。
昭和49年4月、長野県高等学校教諭に採用され、県立阿南高等学校に奉職する。
昭和50年4月、名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程（修士課程）に入学。
昭和52年3月、修士課程を修了。
昭和52年11月、名古屋大学文学部助手となる。
昭和59年3月より、信州大学人文学部助教授。
平成9年3月、『真継家と近世の鋳物師』で名古屋大学より博士（歴史学）の学位を得る。

平成3年7月、野口賞（郷土研究部門、山梨文化会館・山梨日日新聞社・山梨放送）受賞。

☆山梨県文化財保護審議委員会委員。
☆研究主題は、戦国大名の武田氏とその時代の解明、戦国時代以降の職人史（特に鋳物師）、近世のハンコ、音や場などの歴史学と民俗学との接点、災害史など多岐に及ぶ。
☆主著に、『中世の音・近世の音－鐘の音の結ぶ世界－』（名著出版・1990）、『辻の世界－その歴史民俗学的考察－』（名著出版・1991）、『戦国大名武田氏の研究』（思文閣出版・1993）、『中世的世界から近世的世界へ－場・音・人をめぐって－』（岩田書院・1993）、『蛇抜・異人・木霊－歴史災害と伝承－』（岩田書院・1994）、『真継家と近世の鋳物師』（思文閣出版・1996）、『中世の災害予兆－あの世からのメッセージ－』（吉川弘文館・1996）、『武田信玄―伝説的英雄像からの脱却―』（中公新書、1997）、『鳴動する中世―怪音と地鳴りの日本史―』（朝日選書、2000）、『戦国大名の日常生活―信虎・信玄・勝頼―』（講談社選書メチエ、2000）、『山に生きる―山村史の多様性を求めて―』（岩田書院、2001）、『異郷を結ぶ商人と職人』（中央公論新社、2002）、『災害文化史の研究』（高志書院、2003）、『戦国大名と信濃の合戦』（一草舎、2005）、『武田信玄―芳声天下に伝わり仁道寰中に鳴る―』（ミネルヴァ書房、2005）、『実録　戦国時代の民衆達』（一草舎、2006）、『軍師山本勘助―語られた英雄像―』（新人物往来社、2006）、『天下凶事と水色変化―池の水が血に染まるとき―』（高志書院、2007）などがある。